

編集後記

——五蠹・正直者・心——

楚の国の躬という正直者が羊を盗んだ父親のことを役人に告げたところ、楚の宰相は躬を捕えて死刑にせよと命じた。そのため楚では悪事をお上に知らせる者がいなくなった。「君に対して正直な臣下という者は、父にとっては手に負えぬ子供なのである……君主はつまらない人物の行動を広く取りあげて、それで国家の繁栄をはかろうと求めている。とてもかなわぬことである。」こういつて韓非子は、昔の聖賢を称賛し道德・仁愛を借りて法を批判する学者を批判する（『韓非子〔第四冊〕』の「五蠹」篇（金谷治訳注・2005年・岩波文庫）185頁～188頁参照。法を乱す儒家・墨家は五つの木食虫（五蠹：ごと）の一匹らしい）。

北京で弁護士をしている安徽省出身の張氏が16歳（1970年）だったある日、母親が自宅で家族との雑談中に当時の最高指導者毛沢東への個人崇拝を批判し、失脚した劉少奇元国家主席に同情する言葉を口にした。紅衛兵として毛沢東を崇拝し絶対視していた張氏は、母親の発言は許せないと思い密告する手紙を書き近くに住む軍代表に渡した。間もなく母親は逮捕され約2カ月後に反革命犯として処刑されたという（2013年8月11日 MSN 産経ニュース（国際面 [中国ネットウオッチ]））。

楚の宰相から見れば張氏は手に負えない親不孝者であろうが、韓非子から見れば感心な正直者であろう。法治思想の真実を韓非子はオーバーな表現で訴えたと言われるが（前掲『韓非子』283頁（金山「あとがき」参照）、そこには心胆寒からしめるものがある。その後、張氏は懺悔して言った。「私が母親を殺した……その後数十年、夢の中に母親は何十回と出てきた……泣いて土下座して謝っても、口をきいてくれなかった。天が私に与えた罰だと信じている。」（上記ニュース）。彼を変えたのはきっと道德心とか仁愛の心であろう。そういう心の人が増えると国家繁栄は望めなくなるのだろうか。編集も一段落、追々考えてみることにしよう。

法の心、法を学ぶ心、他人の心の痛みを知る心、その大切さをわが法科大学院の教え子たちは、悠々たる時の流れの中で噛みしめてくれるに違いない。

紀要・研究委員会／紀要関係チーム（文責：後藤泰一）

《付記》本年4月より、本法学論集関係業務を後藤泰一・栗田晶が担当することとなった。